

観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



国際観光施設協会 建築部会
ホテル都市分科会
南三一郎建築設計工房 主宰
南三一郎

わが国の総人口は減少傾向が継続する一方、65歳以上の人口は2019年1月現在3562万4000人で総人口の約28%に達しています。昨今頻発する高齢者による運転事故では、運動機能や判断能力の低下が指摘されています。建築物にとって居住者の安全を保障するシェルターとしての機能は最重要であり、いわゆるハンディキャップを負った利用者にとっても安全な環境でなくてはなりません。特にホテルにおいては快適性と安全性にさりげなく考慮したデザインが求められます。そこで、本稿では高齢者等の方々の行動に支障を与えがちな部位について、焦点を当ててみたいと思います。



不安な階段：オープン当初は段鼻のノンスリップ塗装も施されておらず、暗い照明下で見づらい段鼻

み合わせたデザインパターンは不意に滑り危険です。後施工の透明防滑塗料がありますが、個々の製品の耐用年限・劣化状態に注意が必要です。ホテル等では降雨時にマットなどを用意して、ソフト面で補強しています。余談になりますが、外部の濡れた視覚障害者用の点字ブロックは滑りやすい部分です。よりユニバーサルな製品の開発が望まれます。

さらに注意すべきは浴室等の水廻りです。利用者が裸体であることや、石鹸などの利用、

床で滑る

エントランスホールでは大理石や花崗岩が用いられる例が多く、多雨の日本では水を室内に呼びがちで、素材の表面仕上げに工夫し、防滑に考慮する必要があります。粗面と平滑面を組

飲みも嗜められている場合もあり、床の防滑、手摺りの設置、出隅の隅切り（浴槽縁やカウンターなど）、金属・ガラスエッジの面切り（排水溝蓋・縁、ガラス棚等）、転倒に備え細部の納まりに留意し、さらに床の溜り水が早々に引けるように、適切な水勾配で排水



段差の解消：後付けのスロープで対処

を促すことも大切です。床の防滑は清掃性と相反することがありますので、双方よく考慮して素材選択を行ないます。以前海外のデザイナーが設計した高級ホテルの浴室スペースを拝見した折、これらの考慮が皆無で肌寒い思いをした経験があります。

段差で転倒する

2段位の段差は一般に認知しがたく、酔客や会話に勤しむゲストにとって転倒の可能性が高い箇所です。車椅子にとっては障壁となります。状況の許す限り段差の解消または緩勾配の斜路とすべきです。

日常事故での死亡者数が最も高いのが階段での事故と言われています。特に視力の減退した高齢者にとって段鼻を捉え損なうことは極めて危険です。手摺りや明確にその段の縁を認識させる（色で強調する）段鼻のノンスリップは必需の設備です。高齢者の場合、足を引きずる傾向があるため、蹴込みがあると足を引っかける原因となります。また、十分な照度を確保し、段を認知しやすくする考慮も必要です。

ガラスが見えない

最近のホテルデザインは石とガラスで構成されていると言っても過言ではないでしょう。ガラスは開放感を演出し、極めて効果的な素材ですが、それゆえ衝突事故の起こりやすい部位となります。衝突防止マーク（大人用と子ども

用の2段がより良いですが）を設けて存在を現し対策を講じますが、外部の風景と同化して意外と目立ちにくいものです。前面に手摺りを設置することや下枠を高めに設定しガラスの存在を明示するほか、リブガラスを多用したガラススクリーンに関してはエッジの可視化を考慮します。さらに、衝突時のガラス破損による二次災害に備え、強化ガラスの採用や飛散防止フィルムの施工が必須です。「ガラス開口部の安全基準」（板ガラス協会ほか各ガラスメーカーで作成）をご参照ください。

少し視点は変わりますが、ガラス天板のテーブルのエッジ高さは約70cmではぼ3～4歳児の目の高さに該当します。遊びに夢中の幼児にとって、ガラスエッジは認知しづらく危険を伴います。子どもが活発に活動するような場所でのガラスエッジのテーブルの使用は避けた方が良く考えます。



やや視認しづらい連続するリブガラス

標識・案内が見えない

高齢になると誰しも白内障や緑内

障、飛蚊症などの疾病が訪れます。水晶体が濁り、細部や色彩、特に白と黄色、青と黒などの識別が困難になります。従って、そのような色彩の地と図のサインは認識がしづらいものです。サインは地と図を明瞭に差別し、大きく判りやすい字体で表記することが望まれます。さらに平面計画においては、迷路状の導線を避け、ウェイ・ファインディング（way finding：サインシステムや色彩計画、内装のしつらえなどを活用し、正確に目的地へたどり着くことのできる）することが望まれます。

Reception

Reception

上：正常な視界、下：白内障の視界（イメージ）

高齢化時代のおもてなし

ホテルのサービスは、従来マンパワーでホスピタリティを充足してきました。少子高齢化社会の人材確保が難しい時代においては、省力化やセルフサービスの傾向もみられますが、個人的には原則人的サポートで目配りされるべきと考えます。施設設計はその上で、ソフトを補完するきめ細かい心遣いを具現化するものでありたいと考えています。